

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2025 年 9 月 20 日

No.153



1975 年頃の田植えの様子（是政）

もくじ

- 1-2 田んぼとくらし
その2…田植え機の登場で生じた変化
- 3 展示会案内
企画展 古代国司と国司館
- 4-5 NOTE
幻の中世寺院－天台談議所・定光寺－
- 6 series 戦後 80 年－府中と戦争
②府中市域の空襲被害
- 7 最近の発掘調査
府中市 8 例目の和同開珎
- 8 天文はじまり物語
②星のはじまり

田んぼとくらし

かつて府中市内にはたくさんの田んぼがありました。そこは単に米づくりの場所というだけではなく、さまざまな役割や用途がありました。そうした府中の田んぼと人々とのかわりについて 4 回シリーズでご紹介します。

その2…田植え機の登場で生じた変化

稲作の仕事で大変なのは、田植えと稲刈り^かでしょう。特に田植えは、1 枚の田んぼのなかで苗の生長に差が生じないように、短期間で行う必要があります。そのため、手で苗を植えていた頃は、写真のように大勢の人が集まりました。

田んぼとくらし

その2…

田植え機の登場で生じた変化

田んぼが多く残る市内四谷^{よつや}では、現在5月上旬に種まきをして、5月末から6月上旬に田植えをしています。その後は稲の生長に合わせて除草や水の管理を行い、9月下旬から10月上旬に稲刈りとなります。一方で1960年代は、5月上旬に種まき、6月下旬に田植え、10月上旬に稲刈りをしていたそうです。

現在と約60年前の稲作のスケジュールを比べると、種まきと稲刈りの時期はさほど大きく変化していません。しかし、田植えの時期は昔よりも少し早まっています。それはなぜでしょうか。

約60年前の田んぼでは、苗代^{なわしろ}と呼ぶ場所で高さ30cm程度にそだてた成苗^{せいびょう}を使って手植えをしていました。それが1960年代後半に発売されて普及した田植え機だと、成苗ではなく専用の箱（育苗箱^{いくびょうぼこ}）でそだてた10cm程度の小さい苗（稚苗^{ちびょう}）を使う必要がありました。成苗までそだててしまうと、田植え機に適したサイズではなくなってしまうため、田植えの時期が昔よりも早くなったのです。府中だと1970年前後から田植え機を使い始める家が現れ、1980年代には一般的になりました。

田植え機を用いることで変わったのは、それだけではなく。

1枚の田んぼのなかで苗を植える日が異なると、稲の生育に差が生じる確率が高くなってしまい



育苗箱への種まき（四谷）



田植え機での田植え（南町）

ます。それはお米の収穫量が減ることに繋がるのです。そうならないように、田植えは短期決戦で行う必要があります。手植えをしていた頃は、親戚や近所の人などで助け合い、人海戦術^{じんかい}で一気に田植えをしました。こうした共同労働は一般的に結と呼ばれていますが、芝間^{しばま}（現・南町）周辺ではそれを「エー（エイ）」と呼んでいたようです。

このように手植えは多くの人に関わる大変な作業を連日行いました。そのため、田植えが終了した後にゆっくり身体を休められる日を集落全体で設けました。その日を府中では「田植え正月^{しょうがつ}」と呼んでいたそうです。家によってはただ単に休むのではなく、普段よりも豪華な食事やお酒を用意して、田植えが終わったことのお祝いをしたといえます。

しかし、田植え機を利用することにより、家族などのわずかな人員だけで簡単に田植えができるようになりました。また、田植えにかかる日数も大幅に減らすことができました。四谷で稲作を営むある農家は、1970年頃に近所の農家が田植え機を使って家族のみであつという間に田植えを終わらせた様子を見て、その翌年に導入したそうです。このように少人数で田植えができる農家が増えると、それまで行っていた田植えの助け合いが必須ではなくなり、共同労働は行われなくなっていました。それに伴い、集落内で休みを設定する必要もなくなったので、田植え正月は姿を消していきました。

田植え機の登場は、田植えのスケジュールや作業内容を変えただけではなく、人びとのくらしにも影響を与えたのでした。（荒一能）

企画展

展示会案内

古代^{こくし}国司と国司^{こくしのたち}館

～都^{みやこ}から来た役人とそのすまい～

～ 11/3 (月祝)

会場：本館 2 階 企画展示室

府中は古代武蔵国府^{むさしこくふ}があった地。本展は、発掘調査の出土資料や文献史料をもとに、国府とは切っても切れない存在である「国司^{こくし}」と「国司館^{こくしのたち}」にスポットをあてています。

国司は、天皇の代理として都^{みやこ}から 60 余の諸国に派遣された役人で、国府^{くにふ}に赴任しました。国ごとの定員にしたがって守・介・掾・目の 4 つの官職^{しとうかん}（四等官）で構成され、一国の行政や警察、軍事、宗教などを連帯^{れんたい}で統率しました。

国司にまつわる史料はなかなか興味深いものがあります。たとえば平安時代の「国務条々事^{こくむじょうじょうのこと}」（『朝野群載』巻 22 に収録）には、国司の職務や心得が 42 か条にわたり記されており、国司の実像を知るうえで役立ちます。ここには「入境問風」「不可改旧風」とあり、「郷（任国）に入っては郷に従え」の姿勢が国司に求められたことがわかります。なお、平安時代に武蔵守を務めた紀安雄^{きのやすお}は、簡潔かつ慈悲深い政治で役人や民衆を満足させたと『日本三代実録』にあります。どうやら民情を把握し善政^{ぜんせい}を敷いた国司が実際にいたようです。

一方、現任の国司や、国司の元に集まる貢納物^{ぶつ}をねらった襲撃事件^{しゅうげき}も発生しました。『扶桑略記』によれば、919 年（延喜 19）に前任国司である源 仕^{みなもとのかとう}が武蔵国府を襲い、貢納物を奪ったうえ、国衙^{こくが}（役所）の建物を焼いたということです。

さて、国司が国府において居住した場合「国司館」です。ここは単なる住まいではなく、政務や宴^{うたげ}の場でもありました。国司館の建物の大きさや構造は、発掘調査で見つかる柱穴^{はしらあな}から復元できます。府中市では、JR 府中本町駅のすぐ近くで府中崖線^{がいせん}をはさむように国司館跡が 2 か所発見されています。1 か所は、現在「国司館と家康御殿史跡広場」として整備されている駅前の一画です。複数の大型掘立柱建物跡が整然と並び、土坑からは

武蔵国司・巨萬朝臣福信像
福信は『続日本紀』『法隆寺献物帳』などに名が残る実在の奈良時代の人物。その詳しい経歴や、右の復元像の制作過程も本展で紹介。



「□館」^{ふんしよ}と書かれた土器、食器、役人のベルト金具、文書行政の必携品であるやきものの硯^{すずり}などが出土しました。7 世紀後半から 8 世紀前半にかけて機能した国司館と推測されます。もう 1 か所は崖線下の低地で、東西 76 m の溝で区画されたなかに、やはり整然と並んだ複数の大型掘立柱建物跡が重なって確認されました。京都産の緑釉陶器、「大館」と書かれた土器（下写真）、硯などがみつかり、こちらは 9 世紀前半の国司館と考えられます。

今回は、国司館跡出土資料に加え、国司が着用したベルトに付けられた石製飾りや、彼らの身邊にあったであろう品々も展示しています。

また、約 500 年間の内容をぎゅっと詰めこんで「古代」と題していますが、国司のあり方や国司館の機能は絶えず変容していました。このような点にも注目していただければ幸いです。

（石澤茉衣子）

「大館」と書かれた須恵器

「大きい館」を意味するならば、守の館を指すのだろう。
（府中市教育委員会蔵）



幻の中世寺院

一天台談議所・定光寺一



暦応5年(1342)銘の板碑(喜多院所在)

▼ 経筒が埋められた定光寺

かつて府中には、常光寺という寺院がありました。東京競馬場の建設に伴い1930年に移転し、その後廃寺となったようです。

江戸時代の後期に編さんされた地誌のひとつである『武蔵名勝図会』は、この寺の敷地から出土したという、古い銅筒に刻まれた銘文を記録しています。それによると、仁安2年(1167)、「定光寺」の僧侶が勧進して経典を埋めていたことがわかります。常光寺はもともと定光寺の字があてられていて、平安後期にさかのぼる寺院だったのです。しかし、定光寺に関する情報はほかになく、寺の歴史は不明というほかありませんでした。

▼ 談議所としての定光寺

こうしたなか、各地の寺院に「定光寺」で書写された聖教(経典類の注釈書)があることがわかってきました。例えば、栃木県日光市の輪王寺が所蔵する『法華玄義抄』の第七冊には、「文保三年卯月二十九日 於武州府中定光寺談所始之／元応元年六月十八日書了、円海生年三十才也」の書き込みがあって、円海という僧侶が「談所」である

定光寺において、文保3年(1319)4月から元応元年(文保3年4月に改元)6月まで、2か月かけて書写したとわかります。ほかにも、等海、吉海、道俊、印海、幸尊、晴鑑、貞海、頼舜、心賢といった僧侶が定光寺で聖教の書写や講読をしたと聖教に記されています。

「談所」とは談議所のことで、天台教学の講義が行われる、いわば学問寺です。そこでの講義は聖教をテキストとしたため、教学を学ぶ僧侶は優秀な学匠と聖教を求めて談議所を渡り歩きました。遠く美濃国(岐阜県南部)から聖教を求めて訪れた僧侶もいましたから、定光寺は談議所として広く知られていたことがわかります。

さらに、山梨県の身延山久遠寺に所蔵されている『宗大事口伝抄』の奥書によると、定光寺は鎌倉後期に尊海によって再興されて談議所となったのだといいます。

また同書は、①尊海—②実海—③等海—④良海—⑤心昌—⑥祐海—⑦心賢—⑧祐賢—⑨栄海という14世紀から15世紀半ばまでの9名の歴代住持まで記しています。等海、祐海、心賢、祐賢、栄海の名前は、各地に残された定光寺関係の聖教

にも見出すことができ、歴代住持が積極的に聖教の書写・講読を行っていた様子がうかがえます。

とりわけ3世の等海は、定光寺の名を高めた存在でした。『宗大事口伝抄』を著したのも彼で、『血脈相承私聞見』という聖教も彼の手になるものでした。ともに府中において著された聖教で、等海によって定光寺は関東に名だたる談議所として知られるようになったといえます。

このように、常光寺の前身ともいべき定光寺は、平安後期には存在し、その後いったん史料から名が見えなくなるものの、鎌倉後期から室町期には天台の教学を学ぶための談議所として重きをなしていたのです。まさに、失われた中世寺院の実像が明らかになってきたといえるでしょう。

▼ 河越の無量寿寺と尊海

ところで、定光寺歴代住持のうち、再興の祖に位置付けられている尊海は、関東地方の天台にとってきわめて大きな業績を残した人物でした。9世紀前半に慈覚大師・円仁が開創したと伝わる河越の無量寿寺（中院とも。埼玉県川越市）を再興し、談議所としています。さらに隣接地に、北院（現在の喜多院）と南院（現在廃絶）も建立して、河越を関東における天台の一大拠点にしているのです。育成した弟子も少なくなく、各地に分散して金鑽宮（埼玉県神川町）や宗光寺（栃木県真岡市）といった談議所を興しています。

定光寺もまた、河越を拠点として各地に成立した談議所のひとつなのでしょう。2世・実海は尊海の、3世の等海は実海の高弟ですから、尊海の法統が定光寺を発展させていったといえます。

▼ 河越と定光寺の交流

河越と定光寺の密接な関係がうかがえる資料がもう一つあります。喜多院にある、52名もの僧尼名を記した大きな板碑がそれです。暦応5年（1342）、亡くなった尊海等9名の先師の追善供養を目的に、北院2世の寛海等43名の僧尼が助力して造立したものです。僧尼たちは、おそらく尊海をはじめとする先師たちの法統に属しているのでしょう。

注目したいのは、定光寺に関わる僧侶名が尊海のほかにも見出せることです。追善供養の対象となった9名の先師に名のある「壺海」は、定光寺

に関わる聖教の書き込みに見えます。また、助力した僧尼に名を連ねた「良海」は定光寺4世にあたります。定光寺と河越の交流は世代を超えて継続していたのです。

聖教の書き込みも含めて考えれば、定光寺は河越と密接な関係を保ちながら、南武蔵における拠点的な談議所として機能していたといえます。

▼ 府中の魅力

武蔵の政治都市である府中は、宗教活動が活発な場でもありました。人口が集中し、往来が激しく、さまざまな仏教勢力が教線を拡大するのにふさわしい場所だったのでしょう。とりわけ、各地から学僧が訪れる談議所は、優秀な学匠と聖教の存在のみならず、交通の要衝であることが発展要因になったはずです。この点で、府中は鎌倉と北関東をつなぐ大幹線・鎌倉街道上道が貫通する都市で、上道を介して河越にもアクセスしやすい場所でした。河越の天台にとっても、極めて魅力的な場所であったのだと思います。

しかし、定光寺の談議所としての揺るぎない地位は、比較的早くに失われていったようです。談議所・定光寺の活動は『宗大事口伝抄』に記された15世紀前葉の9世を最後に全く見えなくなってしまう。

そうした定光寺が、僧侶たちの活動の証でもある聖教や板碑によって、今、おぼろげな姿を現わしているのです。



暦応5年銘板碑の銘文部分

②府中市域の空襲被害

アジア・太平洋戦争中の 1942 年（昭和 17）4 月 18 日、米軍機による本州初の空襲（空爆）が行われ、東京、神奈川、愛知、兵庫が同日に攻撃されました。それ以降、東京では終戦までに 100 回以上の空襲がありました。特に 1945 年 3 月 10 日の空襲は、都心部で約 10 万人の犠牲者を含め、100 万人以上の罹災者があったことから、「東京大空襲」と呼ばれています。この頃には、日本中のどこでも空襲に遭うかもしれない、という危機感が蔓延していました。

軍事関係施設付近が狙われる確率が高いことから、現府中市域の陸軍燃料廠（浅間町・若松町）、日本製鋼所の工場（日鋼町）、一部が現市域だった調布飛行場（朝日町）等が標的になる可能性がありました。また、都心部での被害情報や、時間に関係なく出る空襲・警戒警報、避難・消火訓練、防空壕設置等、生活にストレスがかかる状態も続いていました。府中から他所の空襲の音を聞いたり、それに伴う火災によって赤く光る夜空を見たりした経験談も残されています。

あまり知られていませんが、府中でも空襲被害はありました。小沢長治著『多摩の空襲と戦災』（1995 年）によれば、空襲は計 11 回あったとされています。府中市発行の戦争体験集『戦火の回想』（1986 年）に掲載された小峰米蔵氏の日記には、そのうち 3 回の空襲被害が具体的に記されています。1945 年 4 月 4 日に矢崎（矢崎町）方面に爆弾（本体が爆発する）と焼夷弾（燃料が飛散・着火して周辺を焼く）が 32 発。5 月 23 日夜に陸軍燃料廠と矢崎に焼夷弾が数発落ち、燃料廠で火災。25 日に分梅（分梅町）南部の多摩川辺りの集落に焼夷弾が落ち火災。同時に東京競馬場付近にも落ちたといいます。

これを裏付けるように、「自宅の庭に手作りした見張り台から、夜に線香花火のようなパラパラとした赤い火が見えた。現在のサントリービール工場の敷地（矢崎町）近辺に 5 発くらい、多摩川に 5 発くらい落ちた。そのうちの 1 発が酪

農家の家に落ちて全焼した」という経験談を聞いたことがあります。これと同じ時と思われる経験談が『府中第一小学校百周年記念誌』（1973 年）に収録された元児童による座談会で語られています。「自宅の牛舎に焼夷弾が落ちて、預かっていた競馬馬を殺してしまった」という内容です。なぜ当時農地が広がっていた矢崎に空襲があったのかという疑問について、地元では「矢崎付近を通る下河原線の線路に留置されていた、都心部の空襲から逃れた車輛が、爆撃機のライトで光ったから狙われた」とか、「近くの是政橋や南武線の鉄橋を狙ったけれど外れた」などと噂されていました。もちろん真偽は不明です。

しかしこの 3 回の空襲情報を整理すると、4 月 4 日は立川・日野など多摩地域広範囲で、5 月 23、25 日は、都心部で大規模な空襲があり、それぞれ犠牲者が出ています。つまり、さまざまな場所を攻撃する過程で、一部の爆撃機が府中市域も空爆したのだと考えられます。もちろん、正確な記録がなく、真相は分かりません。しかし、いずれも比較的少ない被害だったため、府中の空襲被害は実際にその空襲を体験した人以外の記憶にほとんど残らなかったようです。

なお、郷土の森博物館には、市内から寄贈された来歴不明の焼夷弾が保管されています。もちろん中身は空で、爆発・発火の危険性はありません。情報が少ないながらも、府中と空襲被害の関連する可能性が高い、記録・記憶以外の貴重な資料と考えています。（佐藤智敬）

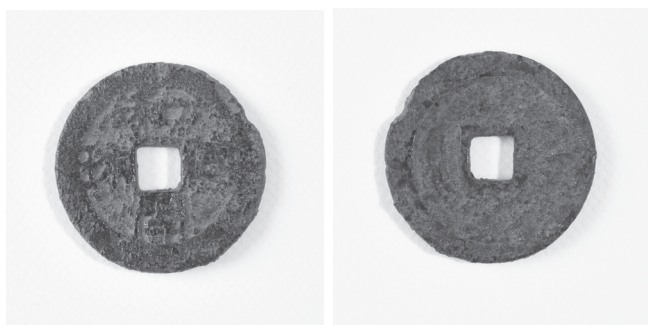


郷土の森博物館に寄贈された焼夷弾（全長約 50 cm、直径約 9 cm の六角柱の構造）。着弾されると内蔵された燃料が燃え、周囲を焼き払う効果があった。

府中市8例目の和同開珎

片町2丁目 府中市ふるさと文化財課

佐藤 梨花



今回発見した「和同開珎」

今春行った調査で、府中市で8例目となる「和同開珎」を発見しました。

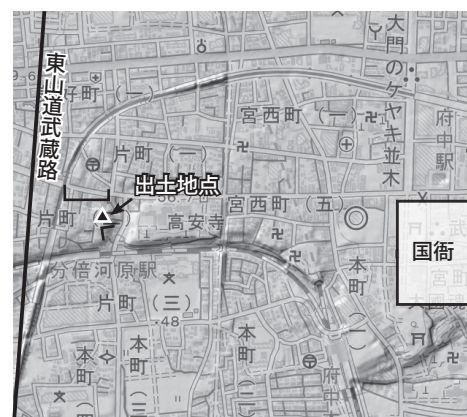
調査地は片町2丁目で、武蔵国衙跡から北西に約800m、西約200mには官道「東山道武蔵路」が通った場所です。調査では奈良・平安時代の溝や竪穴建物跡が見つかり、「和同開珎」は溝の覆土最下層から出土しました。

「和同開珎」は朝廷が発行した銭貨で、武蔵国秩父郡で和銅（自然銅）が産出したという708年（和銅元）に、はじめてつくられたものと『続日本紀』には記されます。発見例は北海道から九州まであり、出土点数は5千枚を超えます。これらの全てが経済活動に伴う結果なのかについては大いに議論がありますが、「和同開珎」以前の「無文銀銭」や「富本銭」の発見が主に近畿地方周辺で、「無文銀銭」は100枚強、「富本銭」が80枚弱であるのに比べると、著しい普及率といえます。自然な経過で普及したというよりも、朝廷の強い意思が働いた結果と考えられます。

関東では、「和同開珎」は竪穴建物跡から見つかることが最も多く、国府域や寺院周辺の集落からの出土も目立ちます。府中市内で発見の8例については、1例が武蔵国分寺周辺の集落、今回を含めた7例が武蔵国府域内の集落からの発見です。

さて、今回発見の「和同開珎」は集落内を通る溝の中にありましたが、この溝のすぐ東側にある竪穴建物跡では「銚」と呼ばれる銅製の帯飾りが出土しています。本誌No.150でお伝えしたとおり、これは官人が正装するときに付けるもので、役所と深い関わりがあります。実は、武蔵国府域で「和同開珎」が発見された調査では、いずれも出土地点の近くから銅製の「銚」が見つっています。「和同開珎」が見つかる場所は、役所に関わる人物と関係が深かったのかもしれない。

調査地の南・北に隣接する場所では、それぞれ方形の区画が発見されており、どちらも国府に関わる施設の可能性が考えられます。特に南側の区画では4頭分以上の馬の歯が見つかり、「東山道武蔵路」の存在から、駅家との関連が考えられます。今回の調査地は武蔵国府の玄関口になるような場所で、そして発見された「和同開珎」も「銚」も、それぞれ武蔵国府の玄関口で働く官人に関わるものだったのかもしれないですね。



和同開珎出土地点



天文はじまり物語

②星のはじまり



宇宙は約 138 億年前に誕生したと考えられています。初めての「星」はいつ、どのように誕生したのでしょうか？

★その名も「ファーストスター」

宇宙で最初に誕生した星は恒星で、その第一世代の星のことを「ファーストスター」と呼びます。残念ながら、これまでファーストスターは直接観測されていません。ですが、誕生したばかりの宇宙をコンピューターでシミュレーションしたり、ファーストスターが残した痕跡を観測したりすることで、その様子を想像することができます。

★ファーストスター誕生

ファーストスターの誕生は、宇宙誕生から約 2 億年後のことと考えられています。宇宙は、ビッグバンで誕生した時、超高温・超高密度の小さな火の玉のような状態でした。その後、宇宙が急速に膨張するにつれ温度が下がり暗くなっていき、誕生から約 38 万年後には暗黒の時代が始まりました。暗黒時代にはまだ星がなく、宇宙はたくさんの水素と少しのヘリウムで満たされていました。やがて、重力によって水素が密度の濃いところにどんどん集まっていきました。そして、水素ガスの塊の中心部が 1000 万℃くらいになると、ガスの中心部で水素の核融合反応が始まり、光と熱を出し始めます。これがファーストスター、宇宙の第一世代の星の誕生です。ファーストスターの多くは巨大な星で、大きさは太陽の数 10 倍～100 倍もあったと考えられています。明るさはなんと太陽の数 10 万～100 万倍、高温のため青白く光っていたことでしょう。

★ファーストスターがもたらしたもの

ファーストスターなどの恒星を光らせている燃料は主に水素で、水素の核融合反応によりヘリウムが作られ、次にヘリウムの核融合反応により酸素や炭素が作られていきます。この核融合反応により、ファーストスターの中で、宇宙で初めて

陽子や電子をたくさん持った重い元素が作られていきました。しかし、鉄まで作られると、それ以上は核融合反応が進まなくなります。それでは、金・銀・プラチナなど、鉄より重い元素はどうやって作られたのでしょうか？それは、ファーストスターが一生の最後に起こす超新星爆発によって、宇宙に初めて作られたのです。

★ファーストスターはいまどこに？

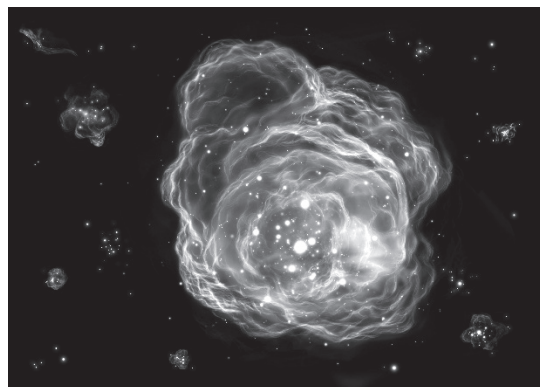
ファーストスターの多くは太陽よりも重いため、核融合反応が早く進み、寿命が短かったはず。例えば、太陽の寿命は約 100 億年ですが、太陽の 100 倍の重さがある星は、寿命が数 100 万年になります。宇宙が誕生してから約 138 億年たっているのに、多くのファーストスターは既に寿命を迎えて超新星爆発を起こしていると考えられます。

★ファーストスターと私たち

ファーストスターが超新星爆発でまき散らした重い元素を含むガスから、第二世代の星、第三世代の星が生まれていきました。実は、太陽は第三世代の星、ファーストスターの孫にあたります。

私たちの体の中にある酸素や炭素、鉄などを宇宙で最初に作ったファーストスター。そう考えると、ファーストスターを調べることは、私たち自身のルーツを調べることにもつながっているのです。

(小林則子)



ファーストスターが最後に爆発する様子（想像図）
© 国立天文台